

〈論文〉

日中間「隠喩」の成立と運用について — コロナ禍の言説を通して —

張 倩

要旨

2020年初め中国、日本を含め多くの国にCOVID-19新型コロナウイルスの感染拡大が発生した。これに対して中日両国は相互援助し共同で新型コロナウイルスが招いた災難や危機に対処している。相互援助の物資に日中の両国民の馴染みある漢詩が使われ応援の言葉としていることが注目されている。両国の共通している歴史上の詩文を引用して互いに応援したり関心を寄せていたりすることを伝え、危機的な状況における日中両国民の友好連携を示されて、コロナ禍時代の漢詩による隠喩的コミュニケーション現象が現れた。本文はジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソンの「レトリックは単なる言葉の綾ではない。それは未知の世界を、人間の理解の領域にたぐりよせる強力な武器となる」¹という修辞生体分析理論を参考にコロナ禍対処に現れた漢詩隠喩の実態、及びそのレトリックによるコミュニケーション効果を検証してみる。

キーワード： 詩歌、隠喩、禍、扶助

一、日中間の詩歌による隠喩の成立

人々の言語生活の中で意識的に無意識的に「隠喩」(metaphor)を使用している。修辞学の中では対象物を直接比喩で言い換えることを隠喩としている。「「～のような」にあたる語を用いないたとえ。性質、状態を直喩よりも一層印象深く聞き手や読者に伝えること」²、「隠喩法とは直喩に反して比喩の比喩たる処を埋没したるものなり」³という。また「メタファーは抽象概念の理解を支える根本的な概念操作である」「言語活動のみならず、思

1 『レトリックと人生』日本語版説明文 大修館書店 1986年2月

2 「隠喩」『ブリタニカ国際大百科事典』Copyright (c) 2014 Britannica Japan Co. Ltd.

3 島村抱月『新美辞学』東京専門学校出版部〈早稲田叢書〉1902年5月

考や行動にいたるまで、日常の営みのあらゆるところにメタファーは浸透している」⁴と指摘されている。

「隠喩」は文勢をひきしめ、間接的な表現を用いることで、受け手の記憶や感情を刺激し、無意識に想像させ、印象を強める効果があり。英語のメタファーのように以下のいくつかの修辭的な効果があるとしている。1. 受け手の過去の体験や記憶と目の前の体験が結びつくこと、2. 感情を揺さぶられたものは強く印象に残ること、3. 人は自ら抱いてしまったイメージには反論しづらい。⁵「用一种事物暗喻另一种事物。隱喻是在彼类事物的暗示之下感知，体验，想象，理解，谈论此类事物的心理行为，语言行为和文化行为」⁶。（隱喩はある事物を以て別の事物を喩える。隱喩は別の事物からの暗示によって、ある事物を感知，体験，想像，理解，言及する心理行為であり，言語行為，文化行為）であるという。一衣帯水の中国と日本は長い友好的に交流する歴史を持っている。心理，言語，文化行為において，その交流の手段は文学形態の一つとしての詩歌によるものが目立つ。詩歌は暗示によって感知，体験，想像させ，さらに話者の意思を理解させる格好いい手段である。日中両国には正にこのような交流手段を豊かに持っている国柄である。

中国において詩歌の繁盛期の一つは唐の時代であるが，この時代の「唐詩」は日本に大きな影響を与えていた。日本においては奈良時代から平安時代にかけての時期を例にとってみてもその影響の規模が見える。その時期日本人によって編纂された代表的な漢詩文集は、『懷風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』そして『経国集』などがある。これらの詩集は日中両国の国民の感情交流，意思疎通に大きな貢献をしていた⁷。漢詩文は東アジアの漢字文化圏の形成と発展に大きな役割を果たしていた。

歴史上日中文人の漢詩贈答の典型的な例として李白と阿倍仲麻呂との友情を示した詩の贈答がある⁸。仲麻呂は遣唐使として中国に来て中国名は晁衡と言うが，在唐期間，故郷を思い和歌，漢詩を作った。

「天の原ふりさけ見れば春日なるみかさの山にいでし月かも」
「翹首望東天，神馳奈良邊
三笠山頂上 想又皎月圓」。

4 ジョージ・レイコフ，マーク・ジョンソン『レトリックと人生』大修館書店 1986 年 2 月 pp.2-4

5 「メタファーが効果的な理由とは」『心理学ラボ』<https://sinrigakulab.com/>

6 『百度百科』<https://baike.baidu.com/item/隱喻/62240?fr=aladdin>

7 これについて最近の論述として以下のものがある：石云涛《沧海虽然阔 诗情接扶桑——中日关系与交流在唐诗中的反映》，《武汉科技大学学报（社会科学版）》2019 年 05 期；陈尚君《睿山新月冷 台峴古风清——唐代的中日交往诗歌》，《古典文学知识》2020 年 03 期。

8 王晓秋『中日文化交流史話』商務印書館 1996 年 12 月 49-50 頁

753年日本に帰る晁衡を李白が見送った。李白が晁衡と過ごした日々を懐かしく思い詩を詠った。「日本晁卿辞帝都 征帆一片绕蓬壺 明月不歸沈碧海 白雲愁色滿蒼梧」（日本の晁卿 帝都を辞す、征帆一片蓬壺を繞る。明月帰らず 碧海に沈み、白雲愁色 蒼梧に満つ）と李白と阿倍仲麻呂は互いに深い望郷の情、友達を偲ぶ念が漢詩による隠喩で遺憾無く示された。

このような文学的な伝統は近代になってからも続いている。明治になってから日中文化人の詩文の贈答はなお盛んな状態であった。明治十年に来日した中国の公使団の事例を次のように指摘されている。

「公使団員たちが来日した明治十年（一八七七）の頃、日本では欧化熱が高まりを見せる一方であるが、尚多くの漢学的教養の高い人が存在し、中国との友好的な交流を切望していた。かれらの活動によって近代最後の漢学の隆盛期を作り上げたのである。」⁹

このような状態について当時の外交官黄遵憲は「海外偏留文字縁 新詩脱口每争伝」¹⁰（海外の日本においても文字の縁があり、自分の新しい詩が出たら日本人の友人たちは争って読み広げてくれる）と言う様子であった。

日中間の詩歌の交流往来について中国の学者のいくつかの研究が見られる。葉渭渠は「古来中日両国の文化には血脈的な繋がりがあり、日本の詩歌もこのような密接な伝統と交流の中から発展してきた」¹¹という。陳友康は「日中両国の詩人の詩歌往来は両国間の文化交流のために重要な架け橋となり、異なる民族の文学が互いに相互影響し合う好例となっている」¹²という。楊起は、日本の漢詩は中国古代詩歌の海外における最大な支流であり、日本人は漢詩を日本語の文法と訓読みで加工し日本的な詩へと加工し、また日本語のリズムに合わせて朗読し「詩吟」というジャンルを開拓したと指摘している¹³。中国の唐の時代において日中間の交流は一つの繁盛期を形成していた。顧衷国は、唐代の中日両国の社会発展と友好政策のおかげで交流が活発で広い範囲にわたっていた。唐詩にその交流の盛況が見えるとしている¹⁴。唐代の交流盛況、この点について魯石、黄江は、唐代の詩人の日本友人に贈る詩歌を考察し、詩歌に現れている日中の友好を再現したという¹⁵。鄧阿寧は、

9 張偉雄『日中文化人の明治期交遊録』大樟樹出版社 2019年6月 54頁

10 同上 52頁

11 叶渭渠《中日古代诗歌学的传统与交流》，《日本研究》1988年03期。

12 陈友康《中日文学交流中的诗词唱酬问题》，《学术探索》2009年第5期。

13 杨起《日本汉诗吟咏现状及其与中日交流的关系》，《安徽农业大学学报（社会科学版）》2014年01期。

14 顾衷国《从唐诗看唐朝的中日文化交流》，《嘉兴师专学报》1982年01期。

15 魯石、黄江《中日人民友谊之歌——读唐诗人赠日本友人诗》，《长春大学学报》1995年04期。

唐代の中日間の詩歌の往来は両国人民の友好交流の賛歌であり、当時の外交使節、留学僧、文人の生活面、精神面の状況を再現するのに有効な素材を提供してくれたと高くその時代の詩歌交流を評価している¹⁶。

修辭的な手法としての「隱喩」は古代から今日まで人々の注目を引いている。古代ギリシャの修辭学の先駆者であるアリストテレスは「詩学」において、曾て修辭現象の全ては「隱喩性言語」であるという。またその手法としては「メタファーは、属から移入されて種に適用された、または種から属に適用された、または類推によってある種から別の種に適用された奇妙な用語の適用である」¹⁷としていた。アリストテレスは隱喩が物事の名称の転換によって、直面している現実に対応するヒントを提示することで使われていることを示した。

隱喩的な表現は日本人の芸術意識にある顕著な表現傾向でもあると言う指摘がある。「日本人の芸術意識には、言外の余韻や余情を楽しむ傾向が特に強い」「むかしから日本人は、奥ゆかしいとされるものにひかれる傾向が強かった。そして「有心」とか「幽玄」とか「象徴」とかの、なんとなくもうろうとしていて実態をつかみにくいことばが、日本美を代表することばとして愛用されてきた」¹⁸という。このような芸術意識は漢詩による隱喩の有効性を十分受け入れる土壌となっている。漢詩は日中両国民にとってそのリズム感、意味合いと響きは長い歴史において一つの共通「知」として成立している。詩の隱喩的効果について、「詩はこの喚起という機能を言葉に最大限に発揮させるために、韻律ばかりでなく、音韻や意味における言葉の響き合いや、さまざまな修辭を駆使することになる。言葉はその直接指示する意味においてだけでなく、あらゆる含意において用いられ、作品それ自体が一つの隱喩として成立する。」¹⁹と指摘されている。一衣帯水の中国と日本は長い友好的な交流の中で、有効な交流手段として文学形態の一つである漢詩によるものが目立つ。このような伝統は近代以後でも日本人の教養の一つとして根強く存在している。

16 邓阿宁《论唐代中日往来诗歌交流》，《重庆大学学报（社会科学版）》2002年03期。

17 Aristotle. Poet. 1457b, "Metaphor is the application of a strange term either transferred from the genus and applied to the species or from the species and applied to the genus, or from one species to another or else by analogy."
<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus%3Atext%3A1999.01.0056%3Asection%3D1457b>

18 鈴木修次『中国文学と日本文学』東京書籍 1987年7月 89頁

19 「詩」の項目 平凡社世界大百科事典 第2版

二、コロナ禍対応に見えた日中詩的隠喩の活用

日中間のコロナ禍との戦いにおいて古人の知恵を利用して詩歌を引用して互いに応援する気持ちを伝えている。日本の友人から以下のような詩歌が示された。「山川異域，風月同天」「豈曰無衣，與子同裳」「青山壹道同雲雨，明月何曾是兩鄉」「四海皆兄弟，誰為行路人」「相知無遠近，萬里尚為鄰」。そして中国から「天臺立本情無隔，壹樹花開兩地芳」「出入相友，守望相助」「滿載壹船明月，平鋪千里秋江」というような詩歌を送った。このように厳しい新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行期において心を温める掛け声を送り合っていたのである。

（一）「山川異域，風月同天」

2020年1月中国の湖北省武漢市に新型コロナウイルス感染症が爆発的に広がった。日本の中国語教育試験機構 HSK 事務局は湖北省にマスクを寄贈した。マスクの入っていた箱に「山川異域，風月同天」（山と川は違っても，同じ風が吹いて同じ月を見る）という詩文が付いていた。これは長い中日間に詩文の文化交流史があったからこそ現れた現象である。この詩は中国では唐の時代，日本では奈良時代，日本の長屋王²⁰が中国・唐代の高僧に送った千着の袈裟の縁に，「山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結來縁」²¹という詩文が刺繍されていた記録による。

山川は異なるが，風月は同じである。仏教を信じる皆さんにお願いするが，共に來たる縁を結ぼう，という気持ちを歌っている。高僧鑑真²²を感動させ渡日することを決意した

20 長屋王，天武天皇5年（676年）- 神亀6年（729年），飛鳥時代から奈良時代にかけての皇族。太政大臣・高市皇子の長男。官位は正二位・左大臣。『唐大和上東征伝』によると，長屋王が唐に送った千着の袈裟に「山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結來縁」と刺繍されていた。これに心を動かされた鑑真は日本行きを決意したという。

21 『全唐詩』第732巻・11「繡袈裟衣縁」原題注：明皇時，長屋嘗造千袈裟，綉偈于衣縁，來施中華。真公因泛海至彼國傳法焉。（唐明皇の時代，長屋が嘗て千着の袈裟を造り偈語を刺繍して中華に届けてきた。鑑真はこれに因って海を渡り日本に仏法の伝授に行かれた。）

22 鑑真大和上（688～763年）唐招提寺の説明文：「天宝元年（742），第9次遣唐使船で唐を訪れていた留学僧栄叡，普照から，朝廷の「伝戒の師」としての招請を受け，渡日を決意。その後の12年間に5回の渡航を試みて失敗，次第に視力を失うこととなりましたが，天平勝宝5年（753），6回目にして遂に日本の地を踏まれました。以後，76歳までの10年間のうち5年を東大寺で，残りの5年を唐招提寺で過ごされ，天皇を始めとする多くの人々に授戒をされました。その渡航の様子は，「東征伝絵巻」（重文）に描かれています。

との美しい説もある²³。

「奈良時代後期の貴族、淡海三船が、鑑真の弟子の思託が著した伝記などを基に書いた伝記「唐大和上東征伝」。その中にこんな記述がある。「(日本から贈られた)袈裟の縁には四句を刺しゅうして『山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結来縁』と記してあった。この古事より日本は仏教が盛んで仏縁のある国と感じ(中略)招きに応じる決意を表した」。四句は「国は異なるが天は同じ。袈裟を僧侶に寄進し縁を結ぼう」という意味だ²⁴。

この HSK 日本事務局から湖北省へ寄贈する支援物資に以上のような感動的な詩文が入っていることについて、中国の通信社が「『山川異域 風月同天』が映し出す中日の歴史と文化の絆」²⁵ という題ですぐ報道した。それによると、新型コロナウイルスによる肺炎の発生以来、日本の関係団体や友好都市から中国への支援物資の箱に記された興味深い偈語(げご、仏の教えを讃える詩句)や詩句が、多くの中国のネットユーザーの称賛を集めているという。このような現象について同報道は「これらの偈や古詩、成語が話題を呼ぶ現象は、中日両国に似通った文化基盤と、互いに分かり合える歴史的、文化な結び付きがあることを示している」²⁶と指摘している。正にそのような共通の文化基盤があったから、上記の漢詩に含まれている日中の相互理解、相互応援というメッセージが千何百年の歴史を経過してもそれに含まれている「隠喩」の力が示されたのである。

(二)「豈曰無衣，與子同裳」

中国最古の詩集『詩経』は、西周初期(前11世紀)から東周中期(前6世紀)に至る約500年間の作品を集められ、儒教での基本経典とされる五経のひとつに挙げられている。その中に『詩経・秦風・無衣』という詩があり、「豈曰無衣? 与子同裳。王于興師，修我甲兵。与子偕行」(豈に衣無しと曰い，子と裳を同じうせんや。王于きて師を興こさば，我が甲兵を修め，子と偕に行かん)，秦軍戦士が出征前に詠んだ戦歌で，戦士が励まし合い，命を顧みず，勇敢で恐れない精神を表現した句である。

この中の「豈曰無衣，与子同裳(豈に衣無しと曰い，子と裳を同じうせんや)は2月10日，日本のフォビジャパン株式会社は中国の第一線の医療関係者に3300着の防護服と6000足

23 長屋王は大規模な写経事業を2度主宰するなど仏教に深く帰依した。袈裟は717年の第9次遣唐使に託されたと見られる。鑑真はそのうちの1枚を手にし，日本のメッセージを読み取っていたのだ。」
浜部貴司「鑑真招いた「来縁」の袈裟」日本経済新聞 2018/6/6

24 浜部貴司「鑑真招いた「来縁」の袈裟」日本経済新聞 2018/6/6

25 中国「新華社」2020年2月12日

26 「『山川異域 風月同天』が映し出す中日の歴史と文化の絆」中国「新華社」2020年2月12日

のシューズカバーを寄付した。全てのダンボールに「豈曰無衣，与子同裳」という温かいメッセージが記されていた。

「服がないというなら、1着の服を一緒に着ればいい!」この2500年も前の詩がこのように、新型コロナウイルスと戦っている中国の第一線の医療関係者に寄付すること、応援し、共に戦っている気持ちを高度な隠喩として活用された。これは共通の敵と戦うことを約束する、正に「戦友」の誓いであろう。

(三)「青山一道同雲雨，明月何曾是兩鄉」

唐代の詩人王昌齡が書いた送別の歌に『送柴侍御』というものがある。「沅水通波接武岡 送君不觉有離傷 青山一道同雲雨 明月何曾是兩鄉」（沅水の波は武岡に通じ、君を送り思わず感傷あり、青山は一道雲雨は同じ、明月は何ぞ兩郷になるのか）。住んでいる場所は違っていても同じ明月を共有していることで、連帯感を示している。このような言葉は、京都の舞鶴市が遼寧省の大連市に寄贈した医療物資のダンボールに書かれていた。

以上のような心温まる支援のあり方、物質的だけではなく、日中間の共通の文化的基盤に立脚する漢詩による「隠喩」を使い、より有効に中国人の心に届く努力が示された。これに対して、中国政府は高く評価している。「日本政府と社会各界の理解と支持に感謝」²⁷と中国の外交部報道官が発言した。

華報道官は「多くの中国のネットユーザーは私と同じように日本国民のこうした心温まる行動に注目していると思う。感染に立ち向かうこの困難な時期、私たちは他の国の人々の中国への同情、理解、支持に心から感謝し、それを心に刻んでいる。ウイルスは容赦ないものだが、人には情がある。疫病は一時的なものだが、友情は長続きするものだ。中国は引き続き国際社会とともに、感染の予防・抑制の戦いに勝利し、一日も早く正常な仕事と生活を回復し、各国の人々と友好的な交流を継続できるよう全力を尽くす」と表明した²⁸。

三、中国から日本への詩的隠喩の返答

以上は日本側から中国に応援する状況に現れた漢詩による「隠喩」を考察したが、次に中国から日本に応援に来た時の「隠喩」を探してみる。

27 「新華社」北京2月5日の報道によると、中国外交部の華春瑩報道官は4日、ネット定例記者会見で「ウイルスは容赦ないものだが、人には情がある」と語ったという。

28 「新華社」北京2月5日の報道による

(一)「天台立本情無隔，一樹花開兩地芳」

清末生れの詩詞名家巨贊²⁹《風月同天法運長 贈日本蓮宗立本寺細井友晉貫主》を作り日本の友人に贈った。詩は以下の通りである。

蓮宗立本寺の細井友晉³⁰に贈る「風月同天法運長，圓融真谷境生光。天臺立本情無隔，壹樹花開兩地芳」（日本と中国は風月も同じ空であり仏法の運は末長く，圓融寺の山谷には仏光がキラキラ光る。互いに天台を本としており私達の情には隔たりはなく，一本の樹に花が咲いたら中日の両地にも芳しくなる）。詩を受けた細井友晋はその後も日中両国の仏教界の交流に尽力していた。

このように国が違ってても，場所が離れていても心は一つにして連携していくという心温まる詩が浙江省から日本に寄贈した応援物質に貼られていた。浙江省にある天台山と繋がりのある日本の宗教，そしてそれに繋がっている人物からこのような詩が選ばれたのである。

(二)「出入相友，守望相助」

今年の3月16日，中国の遼寧省から日本や韓国に緊急防災用品を発送した。報道³¹によると，箱には互いに激励する言葉が入っている。この中の一句は「出入相友，守望相助」である。これは孟子の言葉「死徙無出郷，郷田同井，出入相友，守望相助，疾病相扶持，則百姓親睦」³²から引いているものである。その大意は，家長が死んでも土地を取り上げられ田舎から追い払われることはないし，郷では「井」の字の区画の田を共同で耕し，友として出入りをしたり互いに面倒を見たりして病気が出てもまた助け合う。こうすることで人々は親睦に生活することができる。ここに引用された「出入相友，守望相助」は正にコロナ禍の最中に必要な友人としての姿勢である。この趣旨のことを2500年も前の先人の言葉で示されまた互いに何を「隠喩」しているのかが通じるということは，中日両国の文化的共通基盤があるからできたものだとわざと得ない。

29 巨贊法師（1908～1984），江蘇江陰縣の人。本名は潘楚桐。民國二十年（1931）杭州の靈隱寺に出家，法名は傳戒。字は定慧，巨贊。戦後中国仏教協会副会長など歴任。1984年77歳北京で逝去。

30 細井友晋，1906（明治39）年8月，愛知県生まれ。14歳に名古屋の日蓮宗寺院・本遠寺で得度する。1934（昭和9）年，名古屋の妙伝寺住職に着任した。1951（昭和26）年4月，京都の日蓮宗本山・立本寺住職に着任，積極的に宗教者平和運動と平和運動に参加。1990（平成2）年12月，84歳で逝去

31 「鯨波萬里，一葦可航！遼寧為日韓成立物資捐贈專班」人民網遼寧頻道，2020-03-16

32 《孟子・滕文公上》

(三)「満載一船明月，平鋪千里秋江」

このような例は多く現れているが、2020年3月22日、中国の山東省が日本の和歌県に3万個の医療用マスクを寄贈した。その箱にも漢詩がついていた。「満載一船明月，平鋪千里秋江」。これは宋代の詩人張孝祥の《西江月・黃陵廟》からの引用である。

満載一船明月，平鋪千里秋江。波神留我看斜陽，喚起鱗鱗細浪。

明日風回更好，今朝露宿何妨？水晶宮里奏霓裳，准擬岳陽樓上。

この詩の明るいイメージ「船に明るい月を満載して千里の秋の川を平らに敷き詰める」、この壮大なことをやるから「今夜どこに露宿しても良いのではないか、いつかあの高く聳えている岳陽楼に登って素晴らしい景色が見えるから」。共に頑張ろう、明るい希望があるからということを喩えて日本の友人を励ましたものである。

「隠喩」の成立には共同感覚というものが必要であり、共同感覚は共通の文化基盤に依拠するものである。日中間は長い歴史の中にこのような共通の基盤が形成されたのである。漢字文化圏とか儒教文化圏とかの言う「文化圏」は正にその共通基盤である。

四、漢詩贈答によるコミュニケーション

異文化間コミュニケーションの理論として、「文化背景が異なるということは、コミュニケーションに複雑な問題を提起することになる。文化の違いとは、異なった認識の仕方や価値観を意味しているため、異文化間コミュニケーションの際、人々が、互いの行動から相手をとんでもなく誤解してしまうことは、大いにありえるからである。」³³という。これは異文化間コミュニケーションにおいて警戒しなければならないものである。しかし幸運なことに日中両国にとって、今日の政治問題、歴史問題を除いて、文化や宗教などが背景に著しくコミュニケーション面に複雑な問題が提起されていることは少ない。その理由としてはこのような指摘がある。「中国文化が日本文化に与えた影響ははかりしれない。漢字の伝来とともに日本にもたらされた漢籍の数々は、その後の日本知識人の中心学問となり、いつか日本の伝統文化の土台に根を下ろした。今では中国文化と意識されないで、漢語・故事成語・格言・ことわざなどが、日本の言語生活を形造っている。」³⁴という。この認識が示されたように、文化の共通土台があるからである。故に以上触れたような隠喩による日中間のコミュニケーションが成立でき、応援、支援する実行動となり得たのである。これは実に貴重なことであり、私たちの先人の貢献、寄与によるものである。

33 鍋倉健悦『異文化間コミュニケーション入門』丸善出版 1997年 16頁

34 猪口篤志『日本漢詩』明治書院 平成8年7月 241頁

この漢字文化圏、儒教文化圏の恩恵によって、日中は互いに非常に文化の近い国同士となっている。歴史の財産としての漢詩による隠喩は言葉の力を増強し、生き生きした文は人々を奮い立たせ感化し共鳴を得ることができるものである。以上見てきたように新型コロナウイルスとの戦いにおいて、日中間は物質的な応援以外に、漢詩贈答によるコミュニケーションも行っている。日中間の漢詩贈答は長い歴史を旅たち今日のコロナ禍の時期にも大きな役割を果たしている。明治時代の漢詩の力について次のように指摘されている。「漢詩こそは、時代を敏感に反映した文学であった。何となれば、漢詩は当時の文化を担う武士の知識人の文学であり、そもそも中国で芽生えたその初めから「詩は志なり」（詩経毛伝序）として、思想の表白であり、政治にコミットする文学たることを期待されていたのである」³⁵ という。

「コロナ禍」と言われているほど、今日の新型コロナウイルスの感染拡大で経済的・社会的影響が大きい。人類はいろいろな「災禍」「戦禍」と戦って生きてきた。人類は力合わせて応援支援すればこの危機は必ず乗り越えられるものである。「塞翁が馬」というような隠喩はまた日中間では通じるものである。これに似たような明るい希望を持たせてくれるメッセージとして、次のような言葉がある。「「禍」が意味する「災い」には、「災いを転じて福となす」「災いも三年（置けば用に立つ）」などのことばもあります。新型コロナウイルスによる感染拡大は、まだまだ予断を許さない状況が続きますが、新型コロナウイルスによってもたらされた「災い」についても、働き方や暮らし方をうまく変えて幸せに転じるよう心がけ、時が経ったときに、コロナ禍がきっかけでよいこともあったと思えるように、日々を過ごしていきたいものです。」³⁶ と力強く心温まるものである。このメッセージにも日中間の共通的「知」によって出された隠喩が出ている。「災いを転じて福となす」、これは正に中国前漢時代の司馬遷が書かれた『史記』によるものである。「蘇秦曰、臣聞古之善制事者、轉禍爲福、因敗爲功」³⁷（臣聞く古の善く事を制する者は、禍を転じて福と為し、敗に因りて功を為す）、つまり災いにあっても、その事をよく制御して活用できれば幸せになり災いを福に転じさせ失敗を成功にならせることができるということである。

困難に直面している時、民族や国境を越えて応援・支援する姿勢、行動があったからこそ人類は生きのびてきたものだと思う。現在新型コロナウイルスによる影響はなお終息が

35 入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』研文出版 1989年2月 8頁

36 滝島雅子「「新型コロナウイルス」関連のことば ～「コロナ禍」の使い方～」NHK放送文化研究所メディア研究部・放送用語 http://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20200701_4.html

37 司馬遷『史記・蘇秦列伝』

見えない時期において、ウイルスの感染問題、医療状況の問題、国内の社会、経済の問題などが国際問題にまで拡大されている。このような複雑な局面において、前出の孟子の言葉は大きなインパクトがある。「疾病相扶持」、大きな疾病の危機に直面している時こそ、互いに助け合うことが重要でこれは人類の美徳とされている。これによって危機を乗り越え「則百姓親睦」即ち民が親睦となり世界平和と繋がるものである。日中間は長い歴史から築いてきた漢詩贈答の伝統で相互応援支援をしていることは、危機を乗り越えるのに非常に有効な手段であり、重要な行為であると高く評価したい。

参考文献：

1. 島村抱月『新美辞学』東京専門学校出版部 1902年5月
2. ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソン『レトリックと人生』大修館書店 1986年2月
3. 王曉秋『中日文化交流史話』商務印書館 1996年12月
4. 張偉雄『日中文人の明治期交遊録』大樟樹出版社 2019年6月
5. 叶渭渠「中日古代诗歌学的传统与交流」《日本研究》1988年03期
6. 陈友康「中日文学交流中的诗词唱酬问题」《学术探索》2009年第5期
7. 杨起「日本汉诗吟咏现状及其中日交流的关系」《安徽农业大学学报（社会科学版）》2014年01期
8. 顾衷国「从唐诗看唐朝的中日文化交流」《嘉兴师专学报》1982年01期
9. 鲁石、黄江「中日人民友谊之歌——读唐诗人赠日本友人诗」《长春大学学报》1995年04期
10. 邓阿宁「论唐代中日往来诗歌交流」《重庆大学学报（社会科学版）》2002年03期
11. Aristotle, D. W. Lucas Poetics, Oxford University Press 1981年7月
12. 鈴木修次『中国文学と日本文学』東京書籍 1987年7月
13. 鍋倉健悦『異文化間コミュニケーション入門』丸善出版 平成9年3月
14. 猪口篤志『日本漢詩』明治書院 平成8年7月
15. 入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』研文出版 1989年2月
16. 佐藤信夫『レトリックの記号論』講談社 2017年9月